

「K」の眞実 その九

Kは血継するとも「半生のK」になつたか、「違つたK」か?

Kの「半生」をさうだつたのか?

(1) 下¹⁰「道のためにはすべてを犠牲にするものだというのが彼の第一信条なのですから、慾望や禁欲は無論、たとい

欲を離れた恋そのものでも道の妨げになるのです。」

(2) 上¹⁶「Kの肉が震えるように動いているのを注視しました。彼は元来無口な男でした。平生から何か言おうとする癖がありました。彼の唇がわざと彼の意志に反抗するようにならやすく開かつていたのでしよう。いつたん声が口を破つて出るとなると、その声には普通の人よりも倍の強い力があります。」

(3) 125 上⁶「度々繰り返すようですが、彼の天性は他の思ねくをはばかるほど弱くであります。」

(4) 128 上⁶「彼はいつも話すとおつこぶる強情な男でしたけれども、一方ではまた人一倍の正直者でしたから、自分の矛盾などをひどく非難される場合には、決して平氣でいられない質だったのです。」

(5) 131 下¹³「Kの果断に富んだ性格は私によく知れていませんでした。」

- ・「道」を突き進んでいる。
- ・恋愛はもつてのほか。
- ・他人のことは気にしない。
- ・自分で考え、自分で決断し、自分で行動する。

「半生」のKはいつかの変化したのか?

(6) 115 上⁹「彼の答えは二つもの二通りふんどいう調子でした。」

(7) 119 上³「幸いにKの態度は少しも最初と変わらませんでした。彼のどにも得意らしい様子を認めなかつた私は、無事にその場を切り上げることができました。」

(8) 119 下¹⁵「Kはいつも似合わない話を始めました。」

(9)

上¹⁰「以前私のほうから一人を問題にして話し掛けたときの彼を思い出すと、私はどうしても彼の調子の変わつてゐるところに気が付かずにはいられないのです。」

上⁸「Kはその間いつものとおり重い口を切つては、せつてほつりと自分の心を打ち明けてやります。」

上¹¹「Kはその上半身を机の上に折り曲げるようにして、彼の顔を私に近づけました。御承知のとおり図書館では他人の邪魔になるような大きな声で話ををするわけにいかないのでですから、Kの所作はだれでもやる普通のことです。」

上¹²「Kはそのときには限つて一種変な気持ちがしました。」

上³「一瞬で顎がと、彼は現在の自分について、私の批判を求めたいような点を確かに認めることができたと思いま

した。」

上¹³「彼はいつもにも似ない悄然とした口調で、自分の弱い人間であるのが実際恥ずかしいと言いました。」

上¹⁵「迷つてはいるから自分で自分が分からなくなつてしまつたので、私は公平な批評を求めるよりほかにしかたがない」と言いました。」

上¹³「しかし彼はいつもひとおり今帰つたのかとは言いませんでした。彼は『病気はもういいのか、医者へでも行つのか。』と聞きました。」

上⁶「そうして茶の間の障子を開ける前に、また奥さんを振り返つて、『結婚はいつですか。』と聞きました。」

上¹⁷「それから『何かお祝いを上げたいが、私は金がないから上げることができません。』と語ったそうです。」

上¹⁴「いつも立て切つてあるKと私の室との仕切りの襖が、この間の晩と同じくらい開いています。」

上¹⁷「今まで私に世話をなつた礼が、」
くあつせつした文句でその後に付け加えてありました。」

下³「奥さんに迷惑をかけて済まんからよろしくわびをしてくれという句もありました。」

・平生のKは他人のことは気にせず、自分の道のみを考えている人間だったが、自殺の時点では他者への思い遣りができる人間になつてゐる。

Kが自殺した時点

平生のKに戻つていたら……
「道」を突き進むために自殺した

平生のKに戻つていなかつたら
a 恋愛のために自殺した

「覺悟はないといふこともない

「覚悟」=「自殺」であるので、Kの恋が叶わないと知る前に自殺するつもりだった。ではない

私は奥さんやお嬢さんにKを近づけることによつて、「Kを「人間らしく」しようとしていた。そしてKはお嬢さんに恋愛感情を抱くことにより、「人間らしさ」が芽生えてきたのである。

一方、Kが今まで全身全靈をかけて突き進んでいた「道」というのは、Kに芽生えた「人間らしさ」とは全く別方向のものであつた。「人間らしさ」を身につけることによつてKは今までの自分の人生をふりかえることができ、今までの自分の「他人を無視した生き方」に絶望し

「やがて暁」と云ふ？

「覚悟ならないこともない」と言つたあと、自殺するまで二週間以上の時間が経つてゐる。この時間Kは何をしていたのか？土曜の晩（日曜日早朝）自殺すると決めていたとしたら、二回ほど土曜の晩をやり過ごしていくことになる。どうしてやり過ごしていくのか？

一回目の土曜の晩では、つい数日前まで熟睡できていた私の精神状態はKの発した「覚悟」の捉え方に思いをめぐらすことにより、不安定となり、熟睡できていなかつた。二回目の土曜の晩も、「Kに対する絶えざる不安」のため、熟睡できていないのだ。三回目の自殺の決行日では、私は「ともかくも明くる日まで待とうと決心した」のであり、前の二回の土曜の晩よりは熟睡できていたのである。つまり、Kの自殺は「私の熟睡待ち」であつた。

その間に私はお嬢さんと婚約し、奥さんからそのことを知らされるというイベントが発生した。Kはそんなことがあるうがなかろうが自殺するつもりだつたのだが、それらを知らないこ

とに越したことはない。人への思い遣りが芽生えたKにとつて、自殺による私の動搖も考えたし、結婚への影響も考えた。それらに影響する前に自殺した方がよかつたという意味がある。しかしもつと強いのは、自分が全身全靈をかけて信じていた第一信条は無意味であるということが自殺の原因があるので、それを歩んでいる時点で死ぬべきだつたと考へたのだ。

Kに私は何も救いの手をのばしてやらなかつた。Kは自分の第一信条を疑問に思いだしたが、「策略」によつて第一信条の方向へ進ませようとした。しかしKは第一信条は意味がないと気づいているので、そちらに進むことはできない。恋愛の方面に進むことも、今までの自分の生き方や主張から、私の手前できない。自分の今までの生き方と、これから新たに見えてきた生き方の間に挟まつて苦しんでいた。決して「理想と現実の間に挟まつていたのではない。なぜなら、私の策略によつて簡単に第一信条に戻れるなら、Kは初めから苦しんだりはしない。さつさと第一信条に戻つたはずだ。また、策略によつて簡単に消えてしまう恋でも苦しむはずはない。つまり、自分の人生を否定して、これら新たな人生を歩めるかどうかに悩んでいたのだ。しかしそのときに、私はKに新たな生き方へ他人と関わつて生きていつてもいいこと）を

「それをやめるだけの覚悟」の「それ」は、「お嬢さんへの恋」でもなく、「第一信条」でもなく、Kにとつては「生きること」であった。つまり、ナルシシズムにより、己の信ずる道のためだけに生きていきたいたが、それに疑問を持ち、周りの人と関わることに気づいたとき、周りの人と関わってはいけないと私に言わされたのだ。そこで私は「たった一人で寂しくつてしまがくなつた結果、急に所決した」と述懐している。つまり、私によつて「周りに人がいるよ」と教えられ、私によつて「周りの人へつまり、「私」）はおまえに関わらないよ。」と教えられたのだ。これで恨まないはずはない。恨んでいた証拠にKは私の隣の部屋で自殺している。「一人だ」と気づいたのであれば、外で一人で死ぬことも選択肢にはあるが、そうはしていいない。襖を開け、私に自殺の姿をわざわざ見せてやる。私に対する腹いせがあるし、Kの決断を見せつけてやるのだ。「覚悟」を私に見せたかつたのだ。「見せる」というのは、「関わる」ということだ。関わりを拒まれたKは死ぬことで関わるしかなかつた。

また、「恨み」は関わりであり、「平生のK」は「恨み」という感情 자체も持つことはなかつたはずだ。関わることで様々な感情を噴出させ、Kは死を選んだのである。